

理想の最期 P P K

お寺では、お盆が終わると同時に檀家さんへ「秋彼岸」のご案内を作製します。妻が住職している西林寺（京都大原三千院の近く）では、お彼岸に施餓鬼会をしますので、その原稿がFAXで送られてきました。

『秋彼岸のご案内』

西林寺前住職（妻の父）が平成29年8月1日（享年90歳）に亡くなりました。檀信徒の皆様には、一方ならぬご厚情を頂きましたこと、心よりお礼申し上げます。

岐阜のお寺にいた私は、6月12日の朝方に不思議な夢をみました。西林寺の本堂におられます御本尊は阿弥陀如来でございます。その阿弥陀さまの後ろについて、父が本堂正面の扉から外へ出て行ったのです。父の装束は涅槃衣（ねはんえ）と言って、僧侶の死に装束でした。阿弥陀さまはすぐ後ろをついてくる父の姿を肩越しにふりかえっておられました。ハッと目がさめると、父本人から電話があり、お腹が痛いので今日行くはずのデイサービスを断って欲しいとのことでした。それから2ヶ月足らずで、父は本当に阿弥陀さまに導かれてお浄土へ旅立ったのです。

… 父は「最期は西林寺で死にたい。」とそう申しておりました。お腹が痛いという電話があったから西林寺での2ヶ月足らずの介護ではありましたが、だんだんと父の体が衰弱していくさまを見届け、最後は、朝、私の両手で父の顔を覆っている時でした。父の荒かった息がストンと落ちて父のお浄土への旅立ちがわかりま

した。その日はくしくも西林寺先代（妻の祖父）のなくなった8月1日でもありました。…



義父は一度も病院へ入院することもなく、さらに完全に寝た

きりでもない状態で最期2ヶ月間をお寺（自宅）で過ごしました。現代においては珍しいことで、かつ理想の「最期」だと思いました。義父の穏やかで美しい亡顔がそう語っていました。14年前に亡くなった私の父は心臓発作で急死でした。「苦しむことなく良い死に方で私もそうありたい」と言った人が何人かいました。私には疑問でした。これは「真」のP P K（ぴんぴんころり）ではないように思います。父の葬儀直後から、幼かった娘がソファーに座って手のひらに指で字らしきものを書くようになりました。長年小学校の教師であった父が娘の横に座ってひらがなを教えている気がしました。急死の場合、自らの死を理解できるのか謎でした。今回、義父が本当のP P Kを教えてくださいました。数か月かけて体の衰弱と共に死に対して理解する時間が必要であると思いました。昔の人が「神隠し」を恐れたのもわかります。

西林寺は山の中腹にあります。18時からの通夜式では、山からの涼しい風が御堂内を吹き抜け、僧侶の読経に少し悲しげなヒグラシの「カナカナカナあ〜」と言う鳴き声があい混じり、まるで古いセピア色の映画をみているようで、このまま時間が止まって欲しいと思いました。義父らしい通夜式となりました。 俊徳丸